

## 四谷・荒木町界隈を歩く

JR総武線 信濃町駅 改札前 集合・出発 JR中央・総武線 四ツ谷駅で解散予定 約5.4km

### 1. JR信濃町駅

1894 (明治27) 新宿駅一牛込駅 (飯田橋駅西側) の開通と同時に甲武鉄道の駅として開業。

1906 (明治39) 甲武鉄道の国有化により国有鉄道の駅となる。

1993 (平成5) JR信濃町ビルオープン。1・2階はアトレヴィ信濃町

### 2. 外苑東通り (環3) 新宿区の早稲田鶴巻町交差点 (新目白通り交点) から、港区麻布台の飯倉交差点に至る道路の通称。

神宮外苑の東側を通ることから名前が付いた。弁天町から市谷仲ノ町の間にかけては片側一車線で渋滞が激しい。拡幅の土地確保は進んでいるが全体の完成年度は未定。信濃町、荒木町・舟町付近は完成済み。

**青山上水** 玉川上水から四谷大木戸で分水して渋谷川に助水。大京町から北青山へ流れ一部は赤坂へ、他方は乃木坂、六本木を経て、霊南坂を下る。1660 (万治3) に建設、1722 (享保7) 上水としては廃止。その後は灌漑用水などに利用された。

### 3. 神宮外苑 明治天皇崩御後に建設が計画され、全国からの寄付金を元に、青山練兵場跡地に1926 (大正15) に完成。明治神宮造営局により銀杏並木が設計され、聖徳記念絵画館を中心として、明治記念館、運動場、野球場などが整備された。

当初は明治神宮内苑も外苑も国有地に建設され、維持・管理されていたが、戦後、明治神宮が国から離れたことから、1956 (昭和31) に内苑、外苑は時価の半額で明治神宮に払い下げられ、現在も外苑全体は明治神宮が管理している。ただし、銀杏並木の道は東京都に移管され、競技場はアジアオリンピック開催に備えて国立競技場として文部省に移管された。

外苑地区は1970 (昭和45) に東京都が条例で最高高さを15mに制限されていた。しかし新国立競技場の案 (ザハ・ハディド案) が75mで公表された後、2013 (平成25) に80mに緩和。このため、下記ホテルは高さ50m、また隈研吾の設計で完成した現国立競技場は、最高高さ47.35m、軒高41.46m。

条例施行前にできた旧国立競技場のバックスタンド最上段のフェンス頂部は27.76m、照明塔は52.32m。

**青山練兵場** 江戸期は青山氏の屋敷北側や御鉄砲場があった場所。1886 (明治19) に練兵場が日比谷 (現 日比谷公園) から移転。陸軍大学校も隣接地に移転した。当時は千駄ヶ谷駅方面から引き込み線があり青山練兵場駅があった。1912 (大正元) には明治天皇の大喪の礼が行われた。神宮外苑の建設に伴い代々木練兵場に移転。

**三井ガーデンホテル神宮外苑の杜プレミア** 旧神宮プール・千駄ヶ谷コート (フットサル) の跡地に建てられたホテル。

2019 (令和元) 11月22日開業 RC・一部S 13F 362室 高さ50m

**JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE** S・一部RC・SRC 14F・B1F 高さ59.76m (最高63.70m) 2019 (平成31)

日本スポーツ協会 (JSPO)・日本オリンピック委員会 (JOC) の本部ビル。1・2Fに日本オリンピックミュージアムを併設。

**聖徳記念絵画館** 1926 (大正15) 竣工 RC 2F ドーム頂部の高さ 約32 m 国重要文化財

### 4. 千日坂 坂下に一行院千日寺があることに由来する坂。明治初期までの千日坂は寺の門前から西へ上る折れ曲がった坂だったが、1886 (明治19) に西側に青山練兵場が設置され整備が進んだため、それまでの坂は1906 (明治39) に廃止され、信濃町駅前に上る現在の北向きの千日坂が新設された。新設のこの坂は当初は千日谷の低地に盛り土をした堤状のものだったが、神宮外苑が完成した1926 (大正15) までに、坂のすぐわきまでが高台にされたため、擁壁に沿って上る坂に変化した。

『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』p.064

**一行院千日寺、千日谷会堂** (浄土宗) 江戸時代初期の慶長年間末期に近辺に下屋敷を構えていた永井直勝 (1563~1626) が開基となり、配下で僧侶になった来誉故念のために、下屋敷の一部の土地、2,025坪を与えて庵を建立したのがその起こりという。この来誉故念が、直勝の没後その菩提を弔うために千日を単位とする万日回向を行うようになったため、千日寺と呼ばれるようになり、寺の周辺の谷も**千日谷**と呼ばれるようになった。

明治期には境内北側に鉄道敷設が通され、また昭和30年代には首都高速が建設された。このため現在の境内地は当初の約半分になっている。1964 (昭和39) に再建された本堂はRC・4F。ロッカー式の納骨堂や、本堂を貸し会場として提供したりするなどは、当時としては珍しい取組だった。老朽化が進んだため、2015 (平成27) に再開発に着手。

新本堂は2017 (平成29) 完成。基本デザインは隈研吾で、内部には自動搬送式の屋内墓苑「千日谷浄苑」を併設している。また、既存の納骨堂の減築改修は2018 (平成30) に完了した。

## 5. 明治記念館

- 1873 (明治6) 旧江戸城西ノ丸御殿が火災で焼失したため、紀州徳川家江戸屋敷が仮皇居と定められた。
- 1881 (明治14) 赤坂仮皇居御会食所 (現在の明治記念館本館) が建設され、以降、1889 (明治22) に明治宮殿が完成するまでの間、会食等がここで開かれた。
- 1888 (明治21) 現在の本館「金鶏の間」で、大日本帝国憲法・皇室典範の草案審議の御前会議が行われた。
- 1908 (明治41) 憲法制定の功績で明治天皇から伊藤博文に建物が下賜され、伊藤邸 (品川区大井3丁目) 内に移築。
- 1918 (大正7) 伊藤博文の死後、明治神宮奉賛会へ献納され、明治神宮外苑に再移築。憲法記念館となった。
- 1947 (昭和22) 明治記念館 開館。結婚式場、宴会場・会議施設、レストラン等として利用されている。

## 6. 首都高速4号新宿線

- 1964 (昭和39) 三宅坂JCT-初台仮出入口が開通。外苑出入口もこの時完成。
- 1973 (昭和48) 初台-高井戸が開通。
- 1976 (昭和51) 全線開通。中央自動車道と接続。

## 7. 新助坂 昔このあたりに「新助」という人が住んでいたことから。急坂であるため「スベリ坂」とも呼ばれた。

## 8. 出羽坂 江戸時代後期に永井家屋敷だった坂上の場所に、明治中期に松平直亮伯爵 (なおあき、1865~1940 (慶応元~昭和15)) が神楽坂から移転してきた。この松平直亮伯爵が、松江藩10代藩主 (最後の藩主) で松平出羽守だった松平定安 (1835~82) の三男で、1882 (明治15) に家督を継いだ当主だったため、屋敷前の坂が出羽坂と呼ばれるようになった。松平邸内には修徳園という名庭があったが戦後取り壊され、1949 (昭和24) にホテル松平 (木造平屋・一部2階、63室、西武鉄道が経営) となった。ホテル松平は1960 (昭和35) に廃業、現在、跡地は東京都医業健康保険組合の会館 (東医健保会館) 他になっている。

## 9. 赤坂川 (鮫川) 甲州街道・新宿通り南側の鮫河橋谷と呼ばれる谷から流れ出し、若葉三丁目の谷、南元町の千日谷からの流れを合わせて、赤坂御用地 (旧 紀伊藩邸、現在は東宮御所・迎賓館など) に至り、赤坂見附付近で外堀に注ぎ、溜池を経て、浜離宮わきから東京湾に流れ出ている川。1928 (昭和3) 頃に埋め立てられて、現在は下水道。

## 10. 闇坂 (くらやみざか) 坂の左右にある松巖寺と永心寺の樹木が繁り、薄暗い坂だったため。松巖寺の俗称が茶の木寺であるため、茶の木坂とも呼ばれた。『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』 pp.062-063

## 11. 鉄砲坂 江戸時代、このあたりに鉄砲組屋敷があり、鉄砲訓練場や鉄砲鍛冶場などもあったため。それ以前は、この地に鈴降稲荷という稲荷社があったことから、稲荷坂とも呼ばれていたという。

## 12. 戒行寺坂 (かいぎょうじざか) 坂の途中にある同名の寺に因む。別名油揚坂。これは、昔この坂の途中に豆腐屋があり、油揚をつくっていたためという。『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』 pp.062-063

## 13. 観音坂 坂下にある真成院にある潮踏観音 (しおふみ観音) に因む。別名は西念寺坂・潮踏坂・潮干坂。潮踏観音は江戸時代以前に四谷周辺が潮踏の里と呼ばれたことから。潮の干満につれ台石が湿ったり乾いたりするので汐干観音とも呼ばれた。

## 西念寺 (さいねんじ) 服部半蔵 (1542~97) が1593 (文禄2) に創建した寺。織田信長の命で切腹させられた徳川信康 (徳川家康嫡男) を供養するため服部半蔵は仏門に入り「西念」と号し、麴町の清水谷に安養院を建立した。安養院は、江戸城の濠の拡張工事の際に四谷に移され、このとき「西念寺」と改められた。境内に服部半蔵の墓所がある。また半蔵は槍の名手としても知られ、もともとは4m近かったといわれる槍 (現存するのは258cm、重さ7.5kg) が本堂に保存されている。

## 14. 四谷寺町 若葉1・2丁目と須賀町に計24寺がある。その多くは江戸城の拡張と外堀の建設に際して、現在の千代田区麴町周辺から移転してきたもの。

**15. 須賀神社** 稲荷神社と牛頭天王社（ごずてんのうしや）を併せて、江戸時代には稲荷天王合社・四谷天王社と呼ばれていた。

稲荷神社は、当初赤坂一ツ木村の鎮守として麴町の清水谷に鎮座していたが、江戸城外堀普請のため別当寺の宝藏院とともに1634（寛永11）に現在地へ移転。また牛頭天王社は、当地を所領していた馬込勘由が、旧所領の日本橋大伝馬町の牛頭天王社を1643（寛永20）に氏神様として勧請したもの。1868（明治元）に須賀神社と改称。1836（天保7）に画かれた三十六歌仙絵が堂内に掛かっている。

**牛頭天王**（ごずてんのう）：日本の神仏習合における神で京都祇園社（現八坂神社）の祭神。インドの釈迦の生誕地に因む祇園精舎の守護神とされ、祇園神という祇園信仰の神。神仏習合では、薬師如来の垂迹であるとともに、スサノオの本地とされた。7歳にして身長が7尺5寸（230cm弱）あり、3尺の牛頭をもち、また3尺の赤い角もあったとされる。

本地垂迹：八百万の神は様々な仏が化身として現れた権現であるとする考え方。

本地（ほんじ）：本来の境地やあり方。垂迹（すいじゃく）：神仏が現れること。

**男坂** 東福院坂と谷を挟んで対になっており、印象的な景色となっている。階段わきには改修の際に寄進した人の名が石に刻まれている。2016年公開のアニメ映画「君の名は。」で、この階段とそこからの景色に類似した映像が用いられたことから、劇中の場所として“聖地”とされ、ファンが多く訪れるようになった。

『東京の階段』p.168 『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』 pp.060-061

49段（下から18・16・15段）+3段 幅3.6m 高低差6.1m 長さ約16m 蹴上14~15cm 踏み面29cm 傾斜約27°

**女坂** 江戸名所図会で描かれた石段はこの女坂の場所に相当する。かつては一直線だったが、現在はクランクした区道で、新宿区が改修を行っている。途中の倉庫は境内の神輿庫の直下にあたるが、以前は区立の公衆トイレだった。

クランク 56段（下から30・26段） 幅約3m 高低差6.2m 長さ約25m 蹴上10~11cm 踏み面37cm 傾斜約17°

『東京の階段』p.169 『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』 pp.060-061

**16. 愛染院**（あいぜんいん） 創建年代不詳。1634（寛永11）に江戸城の拡張工事に際して現在地に移転。内藤新宿の設置に関わった浅草商人、高松喜六（喜兵衛）の墓がある。1604（慶長9）の五街道制定時に決まった甲州街道の最初の宿は高井戸で、当初は新宿には宿場は設置されなかった。しかし1697（元禄10）に高松喜六ほかが宿場の開設を幕府に願い出て、開設資金5,600両を納め、問屋場・本陣を経営した。愛染院にはこの他、江戸時代中期の国学者、塙保己一の墓などがある。

**17. 東福院坂**（別名：天王坂） 坂の途中にある同名の寺に因む。別名の天王坂は、須賀神社が以前、牛頭天王社と称し、周辺が天王横町と呼ばれたことに因む。南側に須賀神社の男坂があり、谷道を挟んで葉研状に対になっている。

『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』 pp.060-061

**18. 円通寺坂** 同名の寺の前を若二商店街の道へと下っていくS字にカーブした緩やかな坂道。鮫河橋の谷の最奥部にあたる。

**19. お岩稲荷（於岩稲荷田宮神社）** もとは御家人田宮家の屋敷社で、田宮又左右衛門の娘のお岩が、江戸時代初期に稲荷神社を勧請したことが由来とされる。お岩は浪人の伊右衛門を婿にとったが、伊右衛門が心変わりして一方的にお岩を離縁したため、お岩は狂乱して行方不明となった。別説では伊右衛門が隣家・伊藤家の妾と通じてお岩をいびり殺した。その後、田宮家で変異が相次いだため、田宮邸の跡地にお岩稲荷を建てたという話だが、諸説がある。鶴屋南北の歌舞伎狂言「東海道四谷怪談」等で有名になった。現在は向かいの陽運寺にも祀られている。なお、お岩の墓は豊島区西巢鴨4丁目の妙行寺。

**20. 女夫坂**（夫婦坂）（めおとごか） 由来不明。下ってまた上る一対の坂道であるためか？

**21. 新宿通り・甲州街道** 四谷麴町台地の尾根筋にあたる。神田川（荒川水系）と古川の分水嶺でもある。当時の甲州街道は四ツ谷駅前から150mほどは北側の三栄通りを通過していたが、四谷見附橋が架けられて直線化された。

新宿通りは内堀通りの半蔵門交差点から麴町、四谷を経て、内藤新宿、新宿追分（新宿伊勢丹がある交差点）、新宿駅東口駅前に至る。甲州街道は新宿追分から南下し、新宿駅南口側の甲州街道陸橋を経て国道20号線で甲府、更には長野県の下諏訪へと続き、ここで中山道と接続する。新宿追分から西へ向かうのは青梅街道。明治初期までは四谷区内側も沿道は麴町だった。

**22. 消防博物館・四谷消防署** 1992（平成4）開館 見学無料 新型コロナウイルス感染症対策のため休館中。

**東京メトロ丸ノ内線 四谷三丁目駅** 1959（昭和34） 霞ヶ関－新宿間が開業し、丸ノ内線の全線が開通した時に開業。

**23. シティタワー四谷** RC・25F 共同住宅・163戸 高さ約80m 2004（平成16）竣工 住友不動産

**24. 全勝寺**（曹洞宗） 1578（天正6）、麴町に竜源寺として創建。1616（元和2）に牛込へ、更に現在地へ移転した。

**25. 西迎寺**（さいこうじ） 1490（延徳2）、西迎法師が太田道灌の菩提を葬うために江戸城紅葉山に開いた西光院が起源。江戸城の拡張に際し、1635（寛永12）に現在地に移転。隣接の墓地にも江戸時代初期の五輪塔をはじめとして古い石造遺物が多い。阿弥陀如来坐像：青銅製の铸造仏・1694（元禄7）完成。梵鐘：銅製・1686（貞享3）。共に新宿区有形文化財。

**26. セツ・モードセミナーわきの階段** 『東京の階段』p.81

39段（下から25・14段） 幅3.6m 高低差約10m 長さ約10m 蹴上15～17cm 踏み面25cm 傾斜31～33°

**セツ・モードセミナー** 長沢節（1917～99）が創設したデザイン学校。1954（昭和29）開校、1965（昭和40）に現校舎を建設。校舎はパリのアパートメントを参考にセツが自らデザインしたもの。2017（平成29）閉校。

**アパートの外廊下を通る階段** 61段（下から2・13・15・2・13・15・1段（斜体字部分は鉄製階段））

下から32段で、アパートが載っているデッキ部分に上る。建物の隙間をクランク状に進み、アパートの外階段を上り、2階外廊下へ。そこから更に鉄製階段で高台側へ至る。通行不可ではないというが、かなりプライベート性が高い通路。

**27. 靖国通り** 富久町～市ヶ谷は谷道。曙橋周辺は明治後期に完成。外苑東通りの曙橋陸橋は1957（昭和32）開通

**紅葉川** 新宿御苑の北東側、現在外苑西通りが通っている旧四谷永住町の谷と、富久町の禿坂そばの谷から流れ出て、靖国通りが通る谷を東流する。東京女子医大南側のあけぼの橋通りの谷筋からの流れを合わせ、曙橋を経て、荒木町の策の池からの流れも合わせ、防衛省（尾張藩徳川家上屋敷）の南側を進み、外堀通りに沿って通りの北側、牛込台地の下を東北へ流れ、飯田橋付近で神田川に流れ込んでいた。

**28. 新坂**（しんざか） 明治期に、全勝寺の地所を削って新しくできたので新坂と呼ばれた。

**荒木町・幅が変わる階段** 40段（下から12・8・16・4段） 2021年完成

**29. タワーレジデンス四谷** SRC・23F 共同住宅・41戸 高さ96.4m 2002（平成14）竣工 朝日不動産

当初「四谷曙橋ペアシティ」として建設されていたが、バブル崩壊に伴い工事が10年ほど中断してバブルの塔とも呼ばれていた。

**30. 杉大門通り** もとは全勝寺の門前として発達したが、外苑東通りが建設され、現在は荒木町の飲食街の一つとなっている。

**31. 車力門通り** 甲州街道から松平摂津守の屋敷の通用門（通称・車力門）に至る道。江戸時代はここから米俵を牛車で運び込んでおり、この周辺に車力夫が集まっていたため、通用門は車力門と称され、通日も車力門横町と呼ばれるようになったという。

**32. 策の池**（むちのいけ） 大名屋敷であった頃の庭園の名残。この池で徳川家康（義行という説もある）が乗馬用の策（ムチ）を洗ったことから「策の池」と呼ばれたといわれる。明治時代には屋敷が退き池や庭園が一般にも知られるようになり、舟遊びもできたが、徐々に宅地化して縮小した。戦前は周囲から流れ出した水で高さ4mほどの滝があったが、周囲が開発され戦後に途絶えてしまった。その後、池の周囲は駐車場などになっていたが、数年前に小公園状に整備された。90年代には再開発の話もあったが、近くにある宗教法人解脱会（仏教系の新宗教・1929創設）が、池と周囲の土地を買い上げ、清掃など維持管理を行い保全している。

**策の池北側の階段** 石垣の擁壁わきを窪地へ向かって下る。

39段（下から10・8・11・8・1・1段）、幅2.6～3.4m、高低差5.2m、蹴上14cm、踏み面33cm、傾斜23°

**策の池わきの階段** 策の池から旧料亭千葉の前へ至る屈折して緩やかな階段。上部に古い電柱が残っている。

29段（下から11（5・2・1・2・1）／11（1・3・2・3・2）／7（5・2）段）、幅3.0～3.3m、長さ約40m、

蹴上約13cm、踏み面不規則 『東京の階段』p.135

**33. 都電敷石でできた緩やかな階段**

26段（下から6・9・11段） 車力門通りの突き当りから窪地内へ緩やかに下る。途中に古い電柱が残っている。

**金丸稲荷神社** もともとは、1683（天和3）に松平摂津守が美濃からこの地に移った時に創建した邸内社。

**34. 荒木町・ふぐ料理店そばの階段**

23段（下から2・1・4・15・1段）、幅1.0～1.7m、蹴上10～25cm、踏み面29～cm、蹴上・踏み面は不規則。

**35. 荒木町・窪地を見渡す階段** 地元では「モンマルトルの坂」などと呼んでいる。『東京の階段』p.134

56段（下から7・2・5・7・17・18段）、幅1.9～4.0m、高低差8.6m、長さ約35m、蹴上15cm、踏み面31～33cm、傾斜約25°

**36. 旧崎陽寮前の階段** かつては階段東側に崎陽寮という長崎県荒木町公舎があった。以前は14段で、途中に崎陽寮に至るアプローチ階段があったが、20年ほど前に改修されて現在の姿になった。

16段 幅2.3m 高低差2.9m 長さ約6m 蹴上18cm 踏み面37cm 傾斜26°

**37. 荒木町・仲坂** 1932（昭和7）竣工（6月／8月）。経年変化でステップが西側に傾斜している。

『東京の階段』p.132 『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』 pp.058-059

41段（下から6・11・12・12段） 幅2.4m 高低差6.5m 長さ24m 蹴上16cm 踏み面33cm 傾斜26°

**38. 津の守坂**（つのかみざか） 坂の西側に松平摂津守の屋敷があったため、「せつつのかみ」を略して、津の守坂となった。

別名の小栗坂も「小栗主計」が邸を構えていたからともいわれる。坂が急で段々坂だったが削土されて緩やかになったという。『金色夜叉』（尾崎紅葉）にも記された道。『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』 pp.058-059

**39. 新宿歴史博物館** 新宿区の郷土資料を扱う区立博物館。旧石器時代から昭和時代初期までの展示があり、内藤新宿の宿場の復元模型、江戸時代の商家、昭和初期の文化住宅の復元家屋や、当時の都電なども展示されている。1989年開館。**40. 四谷坂町・住宅地内のクランク抜け道階段** 全部で21段（下6段、上15段）**41. 四谷坂町・住宅地内の階段** 13段（中央部にスロープがある）**42. 坂町坂**（さかまちざか） 江戸時代は無名坂であったらしく、『御府内備考』に坂名は記載されていないが、明治時代にこの辺りが四谷坂町となり、町名に因んで呼ばれるようになった。**43. 四谷本塩町のクランク抜け道階段** やや斜行 20段**44. 交差点から斜めに上る階段** 14段 幅2.0～2.4m 高低差2.1m 長さ4.2m 蹴上15cm 踏み面35cm 傾斜27°**45. 四谷本塩町の急階段**

17段、幅約2m、高低差3.8m、長さ4.0m、蹴上15～26cm、踏み面20～54cm、傾斜44° 『東京の階段』p.86

**四谷コーポラス** 1956（昭和31）竣工 RC 5F 28戸 設計施工：佐藤工業 日本信販（株）不動産部

クリーニング取次など、現在のコンシェルジュサービスの原型ともいえるサービスを導入。また集合住宅で初めて割賦販売を適用、管理規約を制定するなど、現在の日本の民間分譲マンションの原型ともいえるものだった。メゾネットタイプの住戸が中心で、大卒初任給が1万円の時代に、3LDK・77㎡タイプが約230万円だった。耐震性に問題があり、補強費用が高額になったため建て替えとなった。

**アトラス四谷本塩町** 2019（平成31）竣工 RC 6F+B1F 51戸 旭化成不動産レジデンス 上記を建て替えたもので、一部に従前の部品を用いたり、イメージ再現を行っている。メゾネットタイプもあり、従前居住者の9割が再取得して入居したという。

**46. 前川建築設計事務所** 東京文化会館などを設計した前川國男の設計事務所（1954年竣工）。1F壁面を後退させ、ピロティ状の空間をとり、箱形の2F・3Fを持ち上げたように見せている。壁面はコンクリートブロック仕上げ。

**47. コモレ四谷** 四谷駅前地区第一種市街地再開発事業 オフィス (3~30F)・店舗・共同住宅・大学 (桜美林大学・近畿大学)・集会所・語学学校 (日米会話学院)・公共施設 (国際交流基金・国際観光振興機構・多目的施設)  
S造 (一部SRC・RC) 31F・B3F・R1F 最高高さ145m 2019.10完成  
施行:UR都市機構、事業パートナー:三菱地所他、基本設計・監理:日本設計+三菱地所設計、実施設計・施工:大成建設

**48. 比丘尼坂** (びくにざか) (別名:尾国坂) 昔、この坂の近くの尾張家の屋敷に剃髪した老女がいたことから。  
**比丘尼坂から南へ上る階段** 直 12段

**49. 高力坂** (こうりきざか) 坂のそばに幕臣高力小次郎の屋敷があり、邸内の松が高力松と呼ばれて有名だったのにちなむ。

**50. 四谷見附橋** 迎賓館 (旧赤坂離宮) との調和を考慮したデザインで1913 (大正2) に完成。1991 (平成3) に道路拡幅のため架け替えられた。旧橋は長池見附橋として八王子市別所の長池公園内に移設されている。

**51. 四谷見附** 枡形をした四谷見附御門は現駅舎の北側の道の千代田区側にあった。現在も渡櫓の石垣が残されている。

**四ツ谷駅** 1894 (明治27) 甲武鉄道の駅として新宿駅~牛込駅間の開通時に開業。  
1906 (明治39) 甲武鉄道の国有化により、国鉄の駅となる。  
1959 (昭和34) 営団地下鉄丸ノ内線:霞ヶ関~新宿間が開業し全線開通。この時、丸ノ内線四ツ谷駅も開業。  
1996 (平成8) 営団地下鉄南北線:四ツ谷駅~駒込駅間が開通。当初は始発駅だった。

#### 【その他】

**安鎮坂** (あんちんざか) かつて坂の前にあった安藤左兵衛の屋敷内に安鎮大権現の社があったからといい、後に安珍坂と書くようにもなったという。ただ、この安鎮大権現は他に例が見当たらず、どのような権現なのか不明。別名の権田原坂 (ごんだわらざか) は、付近に権田氏の屋敷があったからという説や、権田僧都何某もしくは権大僧都某の碑に因むなど諸説がある。

**鮫河橋坂** 付近の地名「鮫河橋」から。

**薬缶坂** 坂名の由来には以下3つの説がある。①雨の後、朝日を受けて斜面の赤土が銅ヤカンの色に似ていたから。②坂下の近くにやかん職人が住んでいた。③江戸時代、坂下に岡場所があり、そこにいた下級の私娼をヤカンといったことから (遊女は人をだます狐 (野干) といわれ、それが転訛したらしい)。昔はかなりの急坂だったが、鉄道敷設に伴い、位置や方向、勾配が変わっているという。

【町名など】

**愛住町**（あいずみちょう） 1872（明治5）に周辺の寺町と武家地が合併してできた町。隣人同士が共に愛し合いながら暮らしていけることを願って付けられた名。

**荒木町**（あらかちょう） 一帯は江戸時代後期は美濃高須藩（岐阜、3万石）松平摂津守の上屋敷だった場所。北側の靖国通りに向かって開けた谷だったが、庭園の池を造るため、谷の北側に堤を造り小川を堰き止めたため、一帯は完全な窪地になった。現在の町名は荒木志摩守政羽の屋敷があったことに因むといい、津の守坂も昔は荒木坂と呼ばれていたという。周辺に植木屋が多く「新木」から来たという説もある。1875（明治8）町名制定。

**荒木町三業地**（四谷花街） 1872（明治5）に泉水を利用した料亭茶屋が現れ、繁盛したのがはじまり。池畔にできた遊興地で、大正～昭和戦前には新宿あたりからの客でも賑わった。今でも車力門通りや杉大門通りの通り沿いや路地裏などに各種飲食店があり、かつての花街の風情を残している。

**霞ヶ丘町**（かすみがおかまち） 周辺は昔から霞村と呼ばれており、その高台部分が「かすみがおか」となっただけらしい。

1879（明治12） 南豊島郡千駄ヶ谷村に編入された際、字が霞岳（かすみがおか）となった。

1889（明治22） 市制施行により東京市四谷区が発足。同時に四谷区に編入され、四谷霞岳町となる。

1911（明治44） 四谷霞岳町から霞岳町（かすみがおかまち）に改称。

2003（平成15） 住居表示実施。旧霞岳町のほぼ全域が霞ヶ丘町となった。

**片町**（かたまち） 道の片側にだけ町屋が建ち並んだことから。

**左門町**（さもんちょう） 治安維持などを行っていた御先手組（おさきてぐみ）の、諏訪左門という人の組屋敷地だったことから、江戸時代は左門殿町という俗称だった。1872（明治5）に四谷左門町となり、その後、左門町となった。

**信濃町** 江戸時代前期、信濃守となった永井尚政（1587～1668、上総潤井戸藩 → 下総古河藩 → 山城淀藩の藩主、直勝の長男）が、近辺に下屋敷を構えていたことから信濃殿町、信濃原と呼ばれ、それが由来となった。尚政は1622～33には老中も務めた。

**須賀町**（すがちょう） 維新後に改称されてできた須賀神社に因む町名。須賀という地名はしばしば川や海辺で見られるもの。「洲」に場所を示す「処（カ）」で「洲のあるところ」すなわち砂地を意味する。

**舟町**（ふなまち） 北部の寺町と南部の武家地が1872（明治5）に合併して誕生。江戸時代初期に舟板の材料である杉材を伐採していたことから。当時の四谷は杉林が多く、四谷丸太という杉材が出荷されていたという。

**南元町**（みなもとまち） 1943（昭和18）に南町と元町を廃止・統合して新たに創設された町で、町名はそれぞれから一字とったもの。1911（明治44）以前は、元町は「元鮫河橋町」、南町は「元鮫河橋南町」という町名だった。

**四谷** 江戸時代以前には、後の内藤新宿町のあたりまでを含めて、潮踏の里（しおふみのさと）、潮干の里（しおほしのさと）、よつやの原などと呼ばれるすすき原だった。「よつや」という言葉が文献に始めて登場するのは1590（天正18）に内藤清成が記述した『天正日記』。清成がこの付近を調査する際に派遣した家臣の道案内をした角筈村の関野五郎兵衛が、別名「よつや五郎兵衛」と呼ばれていた。

その後、徳川家康が甲州街道と青梅街道を設置した際、その途中に四谷大木戸（現在の四谷四丁目交差点付近）が設けられたが、これが地名としてはじめてつけられた「四谷」だという。

1634（寛永11）、江戸城西北に外堀を設置することになり、立ち退きを余儀なくされた麴町地区の寺社群は四谷地区に移転。須賀町・若葉二丁目一帯に寺院が多いのはこの集団移転のため。外堀は1636（寛永13）に完成し、岸には石垣が築かれ、警備のための城門（見附）が設けられた。更に1657（明暦3）の明暦の大火後、四谷地区などの外堀周辺に移り住んだ人も多く、四谷地区は徐々に江戸市中に組み込まれ、郊外から都市部へと変貌していった。

四谷の名の由来には、大別すると四軒屋説と四つの谷説があるが、いずれも定説にはなっていない。

- 1) 梅屋、木屋（久保屋・保久屋）、茶屋、布屋の4軒の茶屋があったため、「四ツ屋（四ツ家）」となったとする説。ただしこの4軒がそろったのは元和年間（1615～24）になってからで、それ以前から「よつや」と呼ばれていた説明がつかない。
- 2) 千日谷、茗荷谷、千駄ヶ谷、大上谷（おおかみだに）の四つの谷からとの説。もしくは、紅葉川溪谷、鮫河谷、渋谷川溪谷、蟹川溪谷の四つの谷からとの説。これらもわざわざ四つの谷を抜き出す理由がなく、江戸時代から疑義が出されている。前者については、茗荷谷は文京区のものとは違うらしく場所が不明、また大上谷も場所不明。

**四谷坂町**（よつやさかまち） 江戸時代には「坂丁」「四谷坂町」とも呼ばれた。1911（明治44）以降は坂町（さかまち）となったが、2015（平成27）に、住居表示実施により四谷坂町となった。

**四谷鮫河橋町**（鮫ヶ橋町・さめがはしちょう） 若葉二丁目の若二商店街がある谷は、東南へ流れる赤坂川に沿ったもの。幅の狭い小さな谷で、谷底部分は江戸期は町人地で、当初から貧困層が集中したといい、江戸時代中期には岡場所として知られたという。東京への人口流入が激しかった明治期から昭和初期頃までは、貧民窟が形成されていた。現在は普通の商店街・住宅地だが、木造賃貸アパートがやや多く災害時の不安もあり、東京都による整備が一部で行われている。

汐留川最上流部の谷底にあたり、江戸初期まではこの付近まで潮の干満の影響がみられた。地名の鮫河橋の由来としては、鮫がここまで来たから、雨（さめ）が降ると橋が必要になる場所だから、などが挙げられている。またかつては「鮫が村」だったともいわれ、冷水・真水（さみず）が湧く場所だったので、さみず村→さみが村→鮫が村となったという説もある。

江戸時代前期までは鮫河橋と呼ばれていたが、1664（寛文4）に一带は伊賀者組の屋敷地となり「一ツ木村」となった。しかし1696（元禄9）に一带が町奉行支配になると、そこがもともと鮫河橋と呼ばれていたことから、元鮫河橋〇〇町という名の町ができていった。近代以降もこの町名は続いたが、1911（明治44）に四谷区元町、南町、谷町一・二丁目に簡略化され、鮫河橋の名は行政地名からは消滅した。

**四谷三栄町**（よつやさんえいちょう） 1943（昭和18）に筆筒町（現在区内にある筆筒町とは別）・北伊賀町・新堀江町の三つの町が合併して「三栄町」が成立。合併の際「三つの町が栄えるように」という願いから三栄町と名付けられたといわれる。2018（平成30）に住居表示の実施に伴い、四谷三栄町になった。

**四谷本塩町**（よつやほんしおちょう） 1943（昭和18）に塩町1丁目・七軒町・本村町が合併。本村町（ほんむらちょう）と塩町（しおちょう）から一字づつをとって「本塩町」が成立した。塩町は塩問屋の町で、当時の輸送機関である牛車の牛に塩を供していた場所。また本村町は、市谷本村町の一部が明治13年に四谷区に編入してできたもの。市谷本村町は市ヶ谷村の中心的な地区だったことから。四谷七軒町は七軒家があったことから。2017（平成29）に住居表示の実施に伴い、四谷本塩町になった。

**若葉** 1943（昭和18）に元町、谷町ほかを整理して成立。現町名は、新しく出発する心得を若葉に託したもの。

**谷町** 若葉2丁目の谷地は昔は水田だったが、元禄年間（1688～1704）に市街地化された。（四谷鮫ヶ橋谷町）

#### 参考文献・参考サイト

- 『今昔東京の坂』岡崎清記、日本交通社出版事業局、1981 『江戸東京坂道事典』石川悌二、新人物往来社、1998  
 『カラー版 大人のための東京散歩案内』三浦展、洋泉社、2006 『東京の階段』松本泰生、日本文芸社、2007  
 『川の地図辞典—江戸・東京23区編』菅原健二、之潮、2007 『江戸・東京地形学散歩』松田磐余、之潮、2008  
 『東京 花街・粋な街』上村敏彦、街と暮らし社、2008  
 『凹凸を楽しむ 東京「スリパチ」地形散歩』皆川 典久、洋泉社、2012  
 『川跡からたどる江戸・東京案内』菅原健二、洋泉社、2011 『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』松本泰生、洋泉社、2017  
 『東京の坂風情』道家剛三郎、東京図書出版会、2001  
 猫の足あと—東京都・首都圏の寺社情報サイト <http://www.tesshow.jp/index.html>  
 東京23区の坂道 <http://www.tokyosaka.sakura.ne.jp/index.htm> 坂学会 <http://www.sakagakkai.org/>